

(提案9)

日本学術会議主催学術フォーラム「福島第一原発事故にともなう放射線健康不安の精神的影響の実態と地域住民の支援」の開催について

1 開催日時：平成26年2月15日（土）13:00～17:00

2 開催場所：福島県立医科大学大講堂

3 開催趣旨

放射線の健康影響に対する不安により、抑うつ・不安および身体的な不調が増加し、これが場合によっては長期にわたって持続し、場合によっては住民の生活の質が大きく低下することが過去の原発事故における調査から報告されている。福島第一原発事故にともなう放射線の健康影響への不安に加えて、福島県の人々はこれ以外にもさまざまな生活や将来に対しての不安を抱えている。これらの不安の実態、心身への影響、対策や改善方策については、なお未解明である。このフォーラムでは、関連領域の専門家がこの問題を議論しともに解決策を探ることで、その科学的解明と不安を抱える住民への支援への糸口をつかみ、また国や自治体、科学者・専門家、国民に向けてこの問題の重要性を発信する機会としたい。

4 次第（予定を含む。）

(1) 開会挨拶 13:00-13:10

川上 憲人（日本学術会議連携会員、東京大学医学部教授）

(2) 講演

13:10-13:35

春日 文子（日本学術会議第二部会員・副会長、国立医薬品食品衛生研究所安全情報部長）

「福島第一原発事故に対する日本学術会議の活動」

13:35-14:25

Evelyn Bromet（米国ニューヨーク州立大学教授）

「原子力発電所事故がもたらす精神的影響」

14:25-14:50

島藺 進（日本学術会議第一部会員、上智大学神学部教授）

「3. 11後の放射線健康影響情報への不信とその要因」

（休憩10分）

15:00-15:25

矢部 博興（福島県立医科大学教授）

「県民健康管理調査からみた避難者のこころの健康問題」

15:25-15:50

秋山 剛（NTT東日本関東病院精神科部長）

「福島プロジェクト：放射線ストレスへの心理支援」

15:50-16:15

草野 つぎ（福島県会津保健事務所保健師[専門保健技師]）

「地域の現場からみた福島県被災者の多様な不安と困難」

（休憩 10 分）

(3) パネルディスカッション 16:25-16:55

上記報告者

(4) 閉会挨拶 16:55-17:00

安村 誠司（日本学術会議連携会員、福島県立医科大教授）

**(提案10)**

公開シンポジウム「大学学部教育における地理学参照基準について」の開催について

1. 主 催 日本学術会議 地域研究委員会・地球惑星科学委員会合同 地理教育分科会
2. 日 時 平成26年1月12日(日) 10時00分～12時00分
3. 場 所 日本学術会議講堂
4. 分科会の開催 開催予定

5. 開催趣旨

地域研究委員会では、3つの学術分野(地域研究(エリアスタディ)、文化人類学、地理学)が独自に参照基準を作製することになり、文理融合の学問としての地理学では、地域研究委員会地球惑星科学委員会合同の地理教育分科会大学地理教育小委員会で21期より審議を重ねてきた。日本地理学会大会でのシンポジウムや学会員アンケートを経て地理学コミュニティからも意見の聴取を行ない、地理学参照基準案を作製した。シンポジウムでは、地理学参照基準の内容に関して広く討論を行い、その成果を取り込みながら参照基準の報告に活かしていく。

6. 次 第

10:00～10:10

開会挨拶 碓井 照子\*(日本学術会議第一部会員、奈良大学名誉教授)

司 会 山川 充夫\*(日本学術会議第一部会員、帝京大学経済学部地域経済学科教授)

登 壇

10:10～10:30

「大学教育の分野別質保証と参照基準」(仮)

北原 和夫(日本学術会議特任連携会員、東京理科大学大学院科学教育研究科教授)

10:30～11:00

「大学地理教育の質保証に関する教育課程編成上の参照基準案」

戸所 隆\*(日本学術会議連携会員、高崎経済大学地域政策学部教授)

11：00～11：10 （休 憩）

討 論

11：10～11：50

討論者 岡本 耕平\*（日本学術会議連携会員、名古屋大学環境学研究科教授）

小田 宏信\*（日本学術会議連携会員、成蹊大学経済学部教授）

吉田 容子\*（日本学術会議連携会員、奈良女子大学研究院人文科学系教授）

山下 博樹\*（日本学術会議連携会員、鳥取大学地域学部准教授）

石丸 哲史\*（日本学術会議特任連携会員、福岡教育大学教育学部教授）

11：50～12：00 閉会挨拶

氷見山幸夫\*（日本学術会議第三部会員、北海道教育大学教育学部教授）

7. 関係部の承認の有無：第一部承認

（\*印の講演者等は、主催分科会委員）

## (提案 1 1)

公開シンポジウム「地域の再生と国のかたち—東日本大震災の教訓を活かす—」の開催について

1. 主 催：日本学術会議 地域研究委員会 人文・経済地理と地域教育分科会
2. 後 援：日本地理学会、人文地理学会、経済地理学会、科研費基盤研究 (S)  
「東日本大震災を契機とする震災復興学の確立」プロジェクト
3. 日 時：平成 26 年 1 月 12 日 (日) 13:00~17:00
4. 場 所：日本学術会議講堂
5. 分科会等：開催予定
6. 開催趣旨：

3. 1 1 東日本大震災と原子力災害からすでに 3 年を経ようとするものの、また復興ビジョンや復興計画は立てられたものの、被災住民の帰還や被災地域の復旧・復興への足取りは重い。

日本学術会議は東日本大震災復興支援委員会を立ち上げ、2011 年には 7 次 にわたる緊急提言や「復興の目標と 7 つの原則」(第 1 次・2 次) や「未来の エネルギー選択」に関する提言を行い、また各委員会・分科会等も子ども、就 業・産業再生、復興法人創設、復興まちづくり等に関する提言を行ってきた。

今学術の側に求められるのは、これまでの復旧・復興への取り組みを総点検 するとともに、今後の被災地域の復旧・復興への取り組みが未来の国のかたち のあり方とどのように結びつくのかという新しいグランド・デザインを提示す ることであろう。

このシンポジウムでは、文理融合・連携という視点から地域という場を通じ て自然と人間社会のあり方に関わる調査研究を進めてきている地理学から、新 しい「地域の再生と国のかたち」をいかに描いていくべきかについて提示し、 新しいグランド・デザインの議論を専門家と非専門家の壁を超えて深めていき たい。

### 7. プログラム

開会の挨拶

13:00~13:10 山川 充夫\* (日本学術会議第一部会員、帝京大学経済学部  
地域経済学科教授)

司 会 碓井 照子\* (日本学術会議第一部会員、奈良大学文学部名  
誉教授)

報 告

パネリスト

13:10～13:20

「地域の再生と地理学の役割—東日本大震災・原子力事故被災地からの視点—」

山川 充夫\* (日本学術会議第一部会員、帝京大学経済学部地域経済学科教授)

13:20～13:30

「地域の再生とGIS—東日本大震災の教訓を伝承する視点—」

高阪 宏行\* (日本学術会議連携会員、日本大学文理学部教授)

13:30～14:40

「地域の再生と人口問題—復興ビジョンや復興計画を見直す視点—」

大江 守之\* (日本学術会議連携会員、慶応大学総合政策学部教授)

14:40～15:50

「地域の再生と国のかたち—国土計画と国土形成法を見直す視点—」

戸所 隆\* (日本学術会議連携会員、高崎経済大学地域政策学部教授)

15:50～16:00

「地域の再生と地域イノベーション—地域高等教育機関の充実と人材育成の視点から—」

松原 宏\* (日本学術会議連携会員、東京大学大学院総合文化研究科教授)

16:00～16:10 休憩

総合討論

16:10～16:50

コメンテータ 氷見山幸夫\* (日本学術会議第三部会員、北海道教育大学教育学部教授)

山下 博樹\* (日本学術会議連携会員、鳥取大学地域学部准教授)

パネルディスカッション・コーディネータ

矢ヶ崎典隆\* (日本学術会議連携会員、日本大学文理学部教授)

閉会の挨拶

16:50～17:00

氷見山幸夫\* (日本学術会議第三部会員、北海道教育大学教育学部教授)

8. 関係部の承認の有無：第一部承認

(\*印の講演者等は、主催分科会委員)

## (提案12)

公開シンポジウム「都市農業の再構築における養液栽培と施設園芸の役割」の開催について

1. 主催：日本学術会議 農学委員会 農業生産環境工学分科会
2. 共催：農業施設学会，日本養液栽培研究会，日本農業気象学会，園芸学会，千葉大学環境健康フィールド科学センター，宮崎大学農学部，東京都農林総合研究センター，  
(調整中) 日本生物環境工学会，生態工学会，新農林社，(独) 農研機構農村工学研究所
3. 後援：施設園芸協会，九州大学農学研究院
4. 日時：平成26年1月20日(月) 13:00～17:30
5. 場所：日本学術会議講堂
6. 分科会の開催：開催予定
7. 開催趣旨：

魅力ある都市構築のための空間緑化の推進、すなわち、近未来のアーバン・グリーンングの提言が平成19年に農学基礎委員会農業と環境分科会で对外報告された。2050年までに世界人口は90億人に達し、その内の70%は都市に集中することが予想され、魅力的な都市の構築において都市の空間緑化の必要性はますます大きくなっている。また、日本では人口の4割が高齢者となり、都市での人口比率の増大が今後顕著になる。このような状況において人々の生活・人生の質(QOL)を維持向上させ、食料・エネルギー・環境問題を同時並行的に解決する方法のひとつとして、施設園芸の可能性を、特に都市農業で必須要素である養液栽培をはじめ、様々な視点から講演いただく。

都市への急激な人口集中や高齢化の波の中で、農業を如何に持続的な生産システムとして都市とその近郊に定着させ、人々のライフスタイルや文化に貢献し、農村とのバランスを取り地球規模での均衡を図って行くのか、そのイメージは曖昧で方向は多様かつ予測困難であるが故に、近未来での養液栽培・施設園芸の可能性とともに実現化への諸課題について講演、議論したい。
8. 次第：

13:00 開会挨拶

大政 謙次\* (日本学術会議第二部会員，農学委員会農業生産環境工学

分科会委員長，東京大学大学院農学生命科学研究科教授

- 13：05 「対外報告(2007年)：魅力ある都市構築のための空間緑化－近未来のアーバン・グリーンング」を振り返って  
鈴木 義則\* (日本学術会議連携会員，九州大学名誉教授)
- 13：25 東京農業における施設園芸  
望月 龍也 (東京都農林水産振興財団東京都農林総合研究センター所長)
- 13：55 都市農業における養液栽培  
篠原 温 (千葉大学名誉教授，日本施設園芸協会会長)
- 14：25 施設園芸における LCA  
椎名 武夫 (農研機構食品総合研究所流通工学ユニット長)
- 14：55 高齢化と都市農業  
岸田 義典\* (日本学術会議連携会員，株式会社新農林社代表取締役社長)
- 15：25 ( 休憩 )
- 15：40 世界の都市に見る施設園芸の試み (アクポニックの現状と展望)  
松田 誠司 (AGC グリーンテック株式会社海外営業部長)
- 16：10 再構築都市農業の未来像と課題  
古在 豊樹\* (日本学術会議連携会員，千葉大学名誉教授)
- 16：40 パネルディスカッション  
(コーディネーター)  
位田 晴久\* (日本学術会議連携会員，宮崎大学農学部教授)  
奥島 里美\* (日本学術会議連携会員，農研機構農村工学研究所上席研究員)
- (パネリスト)  
鈴木 義則\* (日本学術会議連携会員，九州大学名誉教授)  
望月 龍也 (東京都農林水産振興財団東京都農林総合研究センター所長)  
篠原 温 (千葉大学名誉教授，日本施設園芸協会会長)  
椎名 武夫 (農研機構食品総合研究所流通工学ユニット長)  
岸田 義典\* (日本学術会議連携会員，株式会社新農林社代表取締役社長)  
松田 誠司 (AGC グリーンテック(株)海外営業部長)  
古在 豊樹\* (日本学術会議連携会員，千葉大学名誉教授)
- 17：15 今後の展望 -植物工場と施設園芸-  
橋本 康\* (日本学術会議連携会員，愛媛大学名誉教授)
- 17：25 閉会挨拶  
野口 伸\* (日本学術会議第二部会員・食料科学委員会委員長，北海道大学大学院農学研究院教授)



9. 関係部の承認の有無：第二部

(\*印の講演者は、主催分科会委員)

## (提案13)

公開シンポジウム「野生動物の保全と共存へ向けて」の開催について

1. 主 催：日本学術会議 基礎生物学委員会・統合生物学委員会合同 ワイルドライフサイエンス分科会
2. 共 催：なし
3. 後 援：なし
4. 日 時：平成26年2月9日（日）14:00～17:30
5. 場 所：日本学術会議講堂
6. 分科会の開催：開催予定
7. 開催趣旨：

現代は生物史上例のない大量絶滅時代ともいわれ、生物多様性をいかにして保全し、人類の持続的発展をはかるかが国際的課題となっている。特に哺乳類を始めとする中・大型動物（ワイルドライフ）は、生息地破壊や密猟のため、その多くが絶滅危惧種となっている。また、一般に広い生息地を必要とするため、その保全が他の多くの種や生態系全体の保全につながる“アンブレラ種”でもある。さらに、“フラッグシップ種”として保全活動などで各生態系のシンボルとなることも多い。つまり、その保全は地域の生物多様性と環境保全の要といえる。

しかし、寿命が長く行動範囲も広いいため研究や保全が遅れている。ワイルドライフの保全には、研究技術の高度化、長期調査と現地専門家育成、飼育・半飼育・野生での研究・保全に必要な施設と保護区の整備などに加え、人間-動物間の軋轢を緩和し、動物と共存しながら持続的に発展できる社会システムの構築が不可欠である。

つまり科学研究のみならず、人類学、社会学、地域研究など、人文・社会科学も含めた、文理連携による総合的学問領域「ワイルドライフサイエンス（野生動物保全学）」の創生が求められているそのために私たちは以下の3点が重要だと考えている。

第1に、絶滅の危惧される野生動物を対象とした基礎研究を通じて、その自然の生息地でのくらしを守り、飼育下での健康と長寿をはかるとともに、人間の本性についての理解を深める研究をおこなう。

第2に、フィールドワークとライフサイエンス等の多様な研究を統合して新たな学問領域を創生し、人間とそれ以外の生命の共生のための国際的研究を推進する。

第3に、地域動物園や水族館等との協力により、実感を基盤とした環境教育を通じて、人間を含めた自然のあり方についての深い理解を次世代に伝える。また、人間の本性や動物の心理を探求することを通じて、文理融合の学際的な学問構築と生命共生系の理解をめざすことが必要となる。とくに、人間がこれまでどのように自然と関わってきたのか、これからどう関わるべきなのか、といった問題を総合的に考えていく基盤を作りたい。

本シンポジウムでは、現在野生動物が置かれている現状を踏まえ、新しい観点からいかなる保全と共存の試みがなされるべきかについて、新しい提言をもとに考えてみたい。

## 8. 次 第：

14：00 開催趣旨

山極 壽一\*（日本学術会議連携会員、京都大学理学研究科教授）

14：10 日本の哺乳動物の現状と保全対策（仮題）

三浦 慎悟\*（日本学術会議連携会員、早稲田大学人間科学部教授）

14：40 人獣共通感染症の脅威とその対策（仮題）

吉川 泰弘\*（日本学術会議第二部会員、千葉科学大学大学副学長・危機管理学部教授）

15：10 世界の野生動物保全とフィールドミュージアム（仮題）

幸島 司郎\*（日本学術会議特任連携会員、京都大学野生動物研究センター教授）

15：40－16：00 （ 休憩 ）

16：00 野生動物の生態と人間圏（仮題）

長谷川真理子\*（日本学術会議連携会員、総合研究大学院大学先導科学研究科教授）

16：30 総合討論

（司会）松沢 哲郎\*（日本学術会議第一部会員、京都大学霊長類研究所研究科教授）

（コメンテーター）

鷺谷いづみ\*（日本学術会議第二部会員、東京大学農学生命科学研究科教授）

長谷川壽一\*（日本学術会議第一部会員、東京大学理事・副学長）

17：30 閉会

## 9. 関係部の承認の有無：第二部承認

（\*印の講演者は、主催分科会委員）

## (提案 14)

公開シンポジウム「ケアサイエンスの必要性と看護学の役割」の開催について

1. 主 催：日本学術会議 健康・生活科学委員会 看護学分科会
2. 共 催：日本看護系学会協議会
3. 後 援：医歯薬アカデミー（予定）
4. 日 時：平成 26 年 3 月 1 日（土）14:00～16:00
5. 場 所：日本学術会議講堂
6. 分科会の開催：開催予定あり

7. 開催趣旨：

看護学分科会においては、20 期、21 期と高度実践看護師の機能や役割拡大について 2 回にわたる提言を行ってきた。医療が高度専門分化する状況で、同時に高齢化や慢性疾患をもつ人々も急速に増加している。社会は先進的な医学的介入を必要とする一方で生活調整や生活支援を中心としたケアを必要としている。看護は医療の一翼を担い病気のキュア（治療）の役割を果たしているが、本来の機能はむしろ安楽で健康な生活を支援するケアの役割を持っている。ケアを研究する学問は看護学のほかに社会学、教育学、植物学、心理学など多岐にわたっている。学問領域の壁を超越してこれらをケアサイエンスと呼ぶことができるなら、広くその考えを共有し、ケアサイエンスが今後人々の健康や生活にどのように貢献しようとしているのか議論することによって、看護学のケアとキュアを融合した役割の骨格を明示できるものと考え、企画に至った。

8. 次 第：

14：00 挨拶

14：10 いのちへのケア 植物学から見るケア

古在 豊樹\*（日本学術会議連携会員、千葉大学環境健康フィールド科学センター教授）

14：40 ケアサイエンスの広がりとは市民参加

中岡 成文（大阪大学大学院文学研究科教授）

15：10 ケアの直接的実践としての看護

川島 みどり（元日本赤十字看護大学教授・看護学部長）

15：40 総合討論

（司会）太田喜久子\*（日本学術会議第二部会員、慶応大学看護医療学部教授）

南 裕子\*（日本学術会議連携会員、高知県立大学学長）

16：00 閉会

9. 関係部の承認の有無：第二部承認

（\*印の講演者等は、主催分科会委員）

## (提案15)

公開シンポジウム「安全な原子力であることの要件－福島原子力事故の教訓－」の開催について

1. 主 催：日本学術会議 総合工学委員会 原子力事故対応分科会

2. 共 催：未定

3. 後 援：なし

4. 日 時：平成26年3月5日（水）13時30分～17時40分

5. 場 所：日本学術会議講堂

6. 委員会等の開催：開催予定

7. 開催趣旨：

原子力には、科学的発見から始まり、その後、兵器開発、発電、宇宙推進、放射線医療を含む技術開発、民生利用の歴史があり、膨大な知見が集積されてきたが、今回の東京電力福島第一原子力発電所事故（以下「福島原子力事故」）は、総合技術としての原子力技術に重大な欠落があったことを顕在化させた。福島原子力事故の後、政府・国会・民間・学会・東京電力等において事故調査がなされ、事故対応やそれに備えた準備等についての多くの重要な指摘がなされているが、さらに今後の廃炉と放射性廃棄物の最終処分にいたるまでには多くの課題が山積している。そこで本シンポジウムにおいては、今回の事故を防ぐことができなかったことに関して学術に携わる側としても反省するとともに、福島原子力事故で得られた教訓を生かすことの重要性に鑑み、今後、何らかの形で原子力を利用する場合には絶対に必要である、「安全であることの要件」について議論することとする。

8. 次 第：

13:30 主催者代表挨拶：

矢川 元基\*（日本学術会議連携会員、公益財団法人原子力安全研究協会理事長）

- 13 : 40 日本学術会議代表挨拶 :  
大西 隆 (日本学術会議第三部会員・会長、東京大学名誉教授)
- 13 : 50 講演 : 東日本大震災と福島原子力事故の発生 :  
澤田 隆\* (日本学術会議特任連携会員、一般社団法人日本原子力学会理事・事務局長)
- 14 : 10 講演 : 発電用原子炉の開発と日本の取組み、顕在化した課題とその背景 :  
成合 英樹\* (日本学術会議特任連携会員、筑波大学名誉教授)
- 14 : 40 講演 : 原子力安全に関する具体的課題 :  
関村 直人\* (日本学術会議連携会員、東京大学大学院工学系研究科教授)
- 15 : 00 講演 : 放射線被ばくの現状と人体影響 :  
柴田 徳思\* (日本学術会議連携会員、公益社団法人日本アイソトープ協会常務理事)
- 15 : 20 講演 : 原子力の安全とリスクの考え方 :  
松岡 猛\* (日本学術会議第三部会員、宇都宮大学非常勤講師)
- 15 : 40 休 憩
- 16 : 00 パネルディスカッション / 安全な原子力であることの要件についてパネリスト :  
岩田 修一\* (日本学術会議連携会員、事業構想大学院大学教授)  
笹尾真実子\* (日本学術会議連携会員、東北大学大学院名誉教授、同志社大学研究開発推進機構嘱託研究員)  
白鳥 正樹\* (日本学術会議連携会員、横浜国立大学名誉教授・安心・安全の科学研究教育センター客員教授)  
竹田 敏一\* (日本学術会議連携会員、福井大学附属国際原子力工学研究所特任教授)  
 宮野 廣 (法政大学大学院客員教授)  
山本 一良\* (日本学術会議連携会員、名古屋大学理事 (教育・情報関係担当)・副総長)

17:30 まとめと閉会挨拶:

山地 憲治\* (日本学術会議第三部会員、公益財団法人地球環境産業技術研究機構 (RITE) 理事・研究所長)

9. 関係部の承認の有無: 第三部承認

(\*印の講演者等は、主催分科会委員)



## (提案16)

### 「若手科学者アジア会議」の開催について

1. 主 催 日本学術会議 若手アカデミー委員会
2. 日 時 平成26年2月13日(木)10:00～17:00  
2月14日(金)10:00～18:00
3. 場 所 日本学術会議6-A(1)(2)会議室及び6-C(1)(2)(3)会議室
4. 委員会等の開催 あり

#### 5. 開催趣旨

インターネットなどの情報化技術の恩恵により地球規模での情報交換が盛んに行われ、ますます人口の多いアジアの存在感が増すことは必至である。このような状況を鑑み、アジア地域の未来を創造／想像する「若手科学者アジア会議」を我が国において開催することは同地域の一員としての、我が国がとるべき責務の一つである。文化的、経済的に多様なアジア地域がこれからの未来において貢献できる役割、果たすべき使命について、各国を代表すべき科学者が一堂に会し、議論、対話する機会を企画し催すことは、国際的リーダーシップという観点からも必須であると考えられる。

同会合の目的は、アジア地域の Global Young Academy (GYA) メンバーを招聘し、世界におけるアジア地域の学術的課題を共有し、将来への展望を討議することである。若手科学者の国際的な連携をうながす同会合の意義は GYA から承承されており、その開催情報や成果は GYA のネットワークを介して発信されることとなっている。

#### 6. 次 第

##### 【2月13日(木)】

若手科学者らの自己紹介と各国若手アカデミーの現状と課題について議論をおこなう。

10:00～12:00 若手科学者の自己紹介及びディスカッション「若手アカデミーの現状と課題」(日本学術会議会議室)

14:00～17:00 施設見学（都内の大学の研究所等）

【2月14日(金)】

学術講演3本を行い、参加者全員によるグループ・ディスカッションと結果発表を行う。

10:00 開会挨拶

駒井 章治\*（日本学術会議特任連携会員、奈良先端科学技術大学院大学  
バイオサイエンス研究科准教授）

10:15 学術講演1

**“Infrastructure for transition to knowledge-based economy in  
Kazakhstan”**

Kassymkhan Kapparov (Representative of the National Agency for  
Technology Development of Kazakhstan in the  
United States of America, Kazakhstan)

11:00 学術講演2

日本学術会議若手アカデミー委員会委員（調整中）

14:00 学術講演3

**“Advance in Light Microendoscopy”**

Wibool Piyawattanametha (Director of Advanced Biosensors Laboratory,  
the faculty of medicine, Chulalongkorn  
University, Thailand)

14:45 参加者全員によるグループ・ディスカッション

グループ1：キャリアトラック及び生活と研究（ジェンダー）

グループ2：若手アカデミーの未来

グループ3：科学・技術政策

グループ4：学際的な研究活動とは？

16:00 コーヒーブレイク

16:30-17:30 グループ・ディスカッション結果発表

17:30-18:00 会議総括

参加者は両日とも以下の通り。日本学術会議若手アカデミー委員会委員とアジア各国の若手科学者（GYAメンバー）14名が参加する。

【日本学術会議若手アカデミー委員会委員】

- ・ 駒井 章治\*（日本学術会議特任連携会員、奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科准教授）
- ・ 西山 雄二\*（日本学術会議特任連携会員、首都大学東京人文科学研究科准教授）

ほか

【アジア各国の若手科学者（GYAメンバー）】

- ・ Manjurul Karim, M. (Professor, Department of Microbiology, University of Dhaka, Bangladesh)
- ・ Bing Chen (Associate Professor, Faculty of Engineering and Applied Science, University of Newfoundland, China/Canada)
- ・ Liwei Chen (Deputy director of the i-LAB at Suzhou Institute of Nanotechnology and Nanobionics (SINANO), Chinese Academy of Sciences, China)
- ・ Ranjini Bandyopadhyay (Raman Research Institute (RRI), Bangalore, India)
- ・ Vanny Narita (Government-led Innovation Program Specialist, National Innovation Council of the Republic of Indonesia, Indonesia)
- ・ Kassymkhan Kapparov (Representative of the National Agency for Technology Development of Kazakhstan in the United States of America, Kazakhstan)
- ・ Ramesh Subramaniam (Professor, Faculty of Science, University of Malaya, Malaysia)
- ・ Aftab Ahmad (President of National Academy of Young Scientists in Pakistan, Pakistan)
- ・ Carlo Magno (Director of the Lasallian Institute for Development and Educational Research in De La Salle University, Philippines)
- ・ Hoon Sohn (Chaired Professor & Director of ICT Bridge Center Civil and Environmental Engineering Department Korea Advanced Institute of Science and Technology, Republic of Korea)
- ・ Vinitha Thadhani (Senior Lecturer, Dept of Chemistry, University of Sri Jayawardenepura, Sri Lanka)
- ・ Hsin-Chou Yang (Associate Research Fellow in Institute of Statistical Science, Academia Sinica, Taiwan)

- Orakanoke Phanraksa (Technology Management Center at the National Science and Technology Development Agency, Thailand)
- Wibool Piyawattanametha (Director of Advanced Biosensors Laboratory, the faculty of medicine, Chulalongkorn University, Thailand)

(\*印の講演者等は主催委員会委員)